

私たちはこれまで、自然を信じながら生きてきた。それは今回の大災害の後でも変わらない。

自然は私たちの暮らしや労働を、もっとも基礎的なところで支えている。だがその自然はときに人間たちに災禍をももたらす。自然にこの両面があることはこれまでも人間たちが経験してきたことであり、だから人々は一方では自然の恵みとともに暮らし、他方では自然の禍と折り合いをつけようとして知恵や技を使ってきた。それでも防ぎきれなかったときにはその現実を空け入れ、再び自然の恵みを借りながら自分たちの世界を再建した。そうやって歴史を刻んできたのが、自然と人間の社会史である。それは、今日も変わらない。どんなに厳しくても、これからの私たちの歩みもここにしかない。それでも自然とともに生きるという思い、そしてそれをみんなで支えていこうという多くの人々の思い、そこにしかこれからの社会の歩みもない。

だが今回の大災害には、さらに新しい要素が加わっている。福島原子力発電所の瓦解というこれまでに経験してことのない現実が、である。それは現代文明自身が起こした文明の災禍だといってもよい。

この災禍がいつ終わるのかは、誰も明確に答えることができない。どの程度の影響が出るのかも答えられない。こうして、人間がつくりだしたにもかかわらず、いったん瓦解が始まれば誰も制御できないという現実をかかえながら、これから私たちは生きていかなければならなくなった。そのことがいまの私たちの心を重くしている。

これまでの社会は、「進歩」や「発展」という言葉を無条件で受け入れてきた。だがこれからはそうはいかないだろう。私たちは進歩や発展がもたらすリスクについて、真剣に考えざるをえなくなった。進歩や発展によって巨大なシステムがつくられていけばいくほど、この巨大システムが瓦解したときには大きな災禍が発生する。原発事故が示しているように、広範な地域の人々が被害者になるばかりでなく、自然にも多大な負担を負わせることになる。さらにはその処理のために巨額の税金が投入されることになれば、日本に暮らす人たちは、納税する外国人も含めて、全員でそのツケを払わなければならなくなる。

おそらくこれからの社会では、リスクの小さいことが進歩の基準のひとつにならなければいけないだろう。効率とか生産性といったもの以上に、リスクの少ないシステムをつくることが進歩であるという考え方が共有できる社会をつくる必要がある。

それは森林に対してもいえるだろう。社会のリスクを少なくできる森林とは何かを私たちは考えなければならない。

もちろんそれはこれまでも提起されてきたことでもある。かつてから保安林機能と呼んできたもの、あるいは今日公益的機能と呼んでいるものは、社会的リスクを軽減させる森林の役割をとらえたものだったといってもよい。だがそれだけではなく、大災害が発生したとき森林がどのように被災者を支えることができるのか、さらにはこの役割を最大限に発揮できるようにするには、どのような森林が、どのように配置されている必要があるのかなどもこれからは考えていかなければいけないだろう。

私が子どもの頃には、私の育った世田谷にもまだ雑木林や竹林、畑などがあつた。そして、

地震が起きたら竹林に逃げ込めと教えられたものだった。

昭和恐慌のとき、山間部はひらばの農村よりはるかに影響が少なかったことはよく知られている。山の生産力が山村を支えたのである。私の友人であり、河川工学の研究者でもある大熊孝さんは小さいとき台湾から引き揚げてきた。千葉の海岸近くに仮住まいしたが、しばらくの間生活は大変だった。「その頃はほとんどアサリだけで暮らしていた」と大熊さんはよく言う。すべてを失ったけれど、あの頃は豊穡の海と砂浜があった。学校から帰ると浜に出てアサリを採った。それで一家が命を繋いでいける豊かな自然があった、と。

これもまた社会のリスクを軽減できる自然である。近くによく手入れされた雑木林があれば、燃料の面でも、山菜や茸の面でも、危機に陥った人間たちをいつとき支えることができるだろう。森と川、海、さらに田畑がどのような状態であるとき、それらは危機のとき人間を救うことができるのか。自然に助けてもらえるような都市を造ることも、これからは課題になるかもしれない。私ももう一度、広い意味での社会のリスクと森林の関係を考え直してみたいと思っている。